

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22530930

研究課題名（和文）学校的社会化の現状と歴史に関する研究：＜児童の成立＞の解明に向けて  
 研究課題名（英文）Social interaction and historical analysis of school socialization process in Japan: An attempt to describe the social construction process of 'Jido' (=pupil)

## 研究代表者

北澤 毅 (KITAZAWA TAKESHI)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10224958

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は小さき存在としての子どもが「児童」となる様態を「学校的社会化」として概念化し、相互行為分析・歴史資料分析の2つの方法を用いることで日本における独特な歴史性をもった「学校的社会化」の様態と「児童」の成立過程を明らかにした。さらに発展的課題としていじめ問題に着目し、学校教育における「児童生徒」観、「教師」観の今日的な特質と課題の探究に着手した。

## 研究成果の概要（英文）：

We conceptualized the process of school socialization where children as small existence were transformed into 'Jido' (=pupil). Historically unique process of school socialization in Japan was clarified by using two research methods, interaction analysis of visual data and sociological analysis of historical documents. Another attempt to describe recent features of the image of teachers and students in modern Japan was done focusing bullying problems.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教育学、社会学、歴史社会学、個性調査、学校的社会化、児童、教師、児童虐待

## 1. 研究開始当初の背景

従来子どもの変容は個体主義的な成長・発達の観点から研究されてきた。だが小さき存在である子どもが学校生活のなかで主体性

をもった「児童」へと変容していくことは極めて文化的・社会的特質に満ちた事象である。本研究グループは、これまで子どもの「社会化」をテーマに研究を蓄積し、平成19年度

～21年度科学研究費補助金基盤研究(C)「問題行動・指導・評価をめぐる歴史・社会学的研究:子どもへの〈まなざし〉に着目して」(課題番号 19530761、研究代表者:北澤毅)において、従来の社会化概念とは一線を画した教育場面特有の社会化過程のあり方を研究成果として提示してきた。本研究は上記の研究成果を踏まえ、子どもが「児童」へと変容する様態を「学校的社会化」と定義し、そのメカニズムを教育学・社会学・歴史社会学的視座から解明することを目指す。

## 2. 研究の目的

本研究では、小さき存在である子どもが<児童になる=児童の成立>の様態を「学校的社会化」と定義し、その文化的・社会的メカニズムを明らかにすることを目的とする。さらに日本における「児童」観の歴史性に着目しながら、今日的な教育問題への接近も試みていく。そのために本研究では、<児童の成立>に接近するために、(1)ミクロ社会学的な相互行為分析と、(2)歴史社会学的分析の2つの方法的軸に依拠しつつ、両者を接合させることで、日本における子どもの「学校的社会化」の様相を解明していく。

## 3. 研究の方法

上記「2. 研究の目的」で示したように、本研究では(1)ミクロ社会学的な相互行為分析と、(2)歴史社会学的分析の2つの手法をとる。

### 【手法(1)相互行為分析(社会化論)】

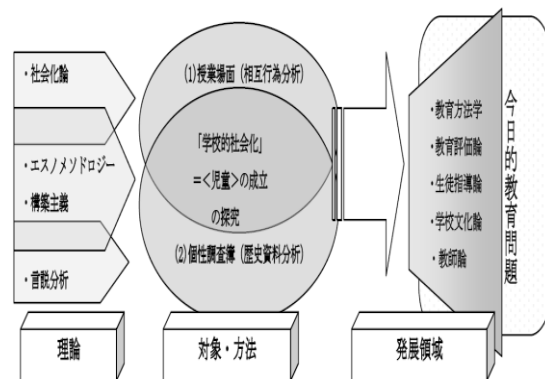
子どもが「児童」へと社会化されていく場面は、学校という特殊な空間の成員としての所作や思考を獲得する場面であるといえる。だが、従来の社会化研究ではそのメカニズムが十分に明らかにされてきたとはいえ、とりわけ教育研究領域においては個体帰属主義的な発達観に基づく説明に偏重してきた傾向がある。それに対し本研究では、子どもが学校空間の成員である「児童」となる場면을、ウイトゲンシュタイン(Wittgenstein, 1953)の述べた「生活形式の一致」が成立している場面として認識し、その文化的・社会的な特質に接近するものである。

### 【手法(2)歴史社会学的分析(言説分析)】

我々が日常的な風景のなかで自明視する「学校的」なるものや「児童」という存在を相対化するために、その成立過程を歴史的に解明することを狙いとする。その際に用いられる素材が個性調査簿であるが、学校という社会装置における「個性」は、子どもたちを学校の成員として同化すると同時に差異化する試みであったと考えられる。すなわちフォーコー(Foucault, 1966, 1972, 1975)が提

示した人間の類型化とそれに伴った新たな主体-客体の成立過程がそこに見てとれるように思われる。このような「児童」(観)の有する歴史性に着目することで、ともすれば自明視される傾向にある日本独特の「学校的」なるものへ接近し、「学校的社会化」の総体を描き上げることを目指す。

本研究では以上のような手法を主としてエスノメトロジー・社会的構築主義の立場から進め、日本における子どもの「学校的社会化」の様相を明らかにするとともに、発展領域として今日的な教育問題に対する各教育学分野に新たな視座をもたらすこととする。なおその探究は以下のように図式化される。



## 4. 研究成果

各年度の研究成果を以下に示す。

### 【平成 22 年度】

当年度は研究実施計画にもとづき、(1)「映像データ分析に基づく学校的社会化過程の実証的解明」(2)「個性調査簿分析による『個性』概念の成立と変遷過程の解明」の2つのテーマへの接近を試みた。

まず(1)においては、本研究の一環として蓄積された映像データから分析を行い、その成果を日本教育社会学会第62回大会(関西大学)において発表した。

次に(2)においては、本研究の前身である平成19年度～21年度科学研究費補助金基盤研究(C)「問題行動・指導・評価をめぐる歴史・社会学的研究:子どもへの〈まなざし〉に着目して」(課題番号 19530761、研究代表者:北澤毅)において収集した明治期以降の小学校の学籍簿・個性調査簿等の歴史的史料の収集を継続して行った。当年度は茨城県(2010年5月～7月)と山形県(2010年9月)の小学校に保存されている各種調査簿等の収集を終え、データベース化に着手した。また、「児童」という小さき存在を介した日本独自の教育・学校文化を解明する研究の一環として、明治期の新聞記事を中心に「児童虐待」の成立と概念的変遷過程に関する調査も

並行して開始した。

#### 【平成 23 年度】

まず(1)においては、本研究の中で蓄積された映像データから分析を行い、その成果を日本教育社会学会第 63 回大会（お茶の水女子大学）において発表した。本発表では、学校的社会化の一諸相として、①入学間もない小学校 1 年生の給食場面において「できるかもしれないこと」を一律に「できない」ものとして扱う「白紙化実践」、②授業の終局場面において児童全員が必ずしも理解「できていないかもしれないこと」を「できたこと」にする児童と教師の共働実践を報告した。

次に(2)においては、①これまでの調査で収集した明治期以降の小学校で作成・記入された「個性調査簿」の成立過程と教育実践における表簿の機能、および、②明治期の新聞記事を中心に「児童虐待」の成立と概念の変遷過程に関する調査結果を、日本教育社会学会第 63 回大会（お茶の水女子大学）において発表した。さらに本年度は、茨城県（2010 年 5 月～7 月）と山形県（2010 年 9 月）に加え、長野県内の小学校にも明治期に作成された児童の個人情報記録簿を記録する各種学校表簿が現存することを、現地調査により確認した。これにより、明治期末には各地の学校で児童一人一人の「個性」を把握し、表簿に記入する実践が行われていたことが明らかとなった。

#### 【平成 24 年度】

本年度は(2)において、明治・大正期に「児童虐待」を報じた新聞記事の収集・分析を継続して行い、近代日本における「児童」概念の成立過程と意味の変遷に関する論文化を行った。

さらにこれまでの研究成果をふまえながら、今日的な「児童生徒観」及び「教師観」を示す問題のひとつとして、本年度より大津いじめ自殺事件を事例として児童生徒の「いじめ自殺」をめぐる言説実践の実証研究に着手した。本研究では、大津いじめ自殺事件を報じた新聞・雑誌・テレビ・インターネットなど各種メディア情報を継続的に収集し、本件の初期報道の特徴に関する実証研究を蓄積しつつある。また、現地におもむき報道関係者や学校関係者にインタビューを実施し、現場の声の収集も開始している。

以上の研究により蓄積された成果は、研究成果報告書『学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて』（2013）にまとめられている。本報告書は、「第 1 部 学校的社会化の現在」「第 2 部 学校的社会化の歴史」「第 3 部 『いじめ問題』の解読」から構成されている。第 1 部は、小

学校で収集した映像データの分析から学校的社会化の諸相を論じた実証研究により構成されている。第 2 部には、明治・大正期に記録された個性調査簿及び学籍簿等の史料から、当時の教師・児童概念および教師による児童理解の実践を明らかにした実証研究が収録されている。第 3 部では、2012 年に再燃した「いじめ問題」をメディア報道の言説実践と教育関係者へのインタビューから記述することを試みた論稿が収録されている。本報告書は、学校的社会化の現状と歴史、及び児童観の形成の様態を包括する論文集であり、〈子ども〉（＝児童生徒）をめぐる今日的な「理解観」の問い直しを目指す本研究の成果と位置づけることができる。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 18 件）

- ① 間山広朗、儀式的行事と学校的社会化—学校儀礼の実証的記述をめざして、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 北澤毅)研究成果報告書 学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて、査読無、2013、67-77
- ② 小野奈生子、推論実行機械の使用にみる「1 年生らしさ」の形成過程について、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 北澤毅)研究成果報告書 学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて、査読無、2013、23-30
- ③ 矢島毅昌、保幼小接続における「白紙化実践」としての「学校的社会化」—「はじめての給食」の指導に見る保幼／小での教育理念と方法の転換、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 北澤毅)研究成果報告書 学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて、査読無、2013、15-22
- ④ 鶴田真紀、授業における挙手をめぐる教師—児童間の相互行為、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 北澤毅)研究成果報告書 学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて、査読無、2013、31-43
- ⑤ 稲葉浩一、要請される「個性」と「理解」—児童生徒理解観の歴史性に着目して、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 北澤毅)研究成果報告書 学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて、査読無、2013、123-132
- ⑥ 高橋靖幸、児童虐待防止法にみる「教育の

対象としての児童」、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 北澤毅)研究成果報告書 学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて、査読無、2013、93-100

- ⑦水谷智彦、「教師の懲戒権」確立の前史—規則適用における裁量権付与の過程、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 北澤毅)研究成果報告書 学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて、査読無、2013、79-92
- ⑧越川葉子、大津いじめ自殺事件報道にみる社会問題の構築研究の可能性、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 北澤毅)研究成果報告書 学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて、査読無、2013、151-158
- ⑨山田鋭生、生徒指導における教師の「いじめ」理解の構造—「出来事カテゴリー」への着目による分析、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(研究代表者 北澤毅)研究成果報告書 学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて、査読無、2013、177-187
- ⑩北澤毅、誰が「自殺練習」を見たのか？—「大津いじめ自殺問題」解読のためのノート、現代思想 12 月臨時増刊号、査読無、第 40 巻 16 号、2012、135-141
- ⑪北澤毅、「教育と責任」の社会学序説—「因果関係と責任」問題の考察、教育社会学研究、第 90 集、査読無、2012、5-23
- ⑫小野奈生子、学校的社会化についての一試論—「推論実行機械」概念の利用可能性、共栄大学研究論集、査読無、2012、第 10 巻、235-246
- ⑬有本真紀、明治期学校表簿にみる児童理解実践—「個性調査簿」の成立過程、立教大学教育学科研究年報、査読無、第 55 号、2012、5-26
- ⑭岡和香子・山田鋭生、「いじめ」問題へのナラティブ・アプローチ—生活指導・生徒指導の社会的実践／分析の試みとして、立教大学大学院教育学研究集録、査読無、2012、第 9 号、29-48
- ⑮北澤毅、「学校的社会化」研究方法論ノート—「社会化」概念の考察、立教大学教育学科研究年報、査読無、54 巻、2011、5-18
- ⑯有本真紀、儀式／道徳教育と唱歌—「同情」の作動に着目して、音楽教育実践ジャーナル、査読無、8 巻 2 号、2012、14-21
- ⑰稲葉浩一、フィクションとしての学校文化—調べ学習場面の記述から、立教大学大学院教育学研究集録、査読無、第 8 号、2011、15-26
- ⑱鶴田真紀、学校的ルーティーンの産出にみ

る社会化機能—小学校 1 年生の帰りの会に着目して、立教大学教育学科研究年報、査読無、第 54 号、2011、51-62

[学会発表] (計 6 件)

- ①間山広朗・矢島毅昌・山田鋭生、学校的社会化の諸相 (3) —〈白紙化実践〉と〈文の共働制作〉への着目、日本教育社会学会第 63 回大会、2011 年 9 月 24 日、お茶の水女子大学
- ②高橋靖幸、社会問題としての児童虐待—「児童虐待防止法」(昭和 8 年)をめぐる「保護される児童」の構築主義的分析、日本教育社会学会第 63 回大会、2011 年 9 月 24 日、お茶の水女子大学
- ③有本真紀・稲葉浩一、記録される「個性」—児童理解実践としての個性調査、日本教育社会学会第 63 回大会、2011 年 9 月 23 日、お茶の水女子大学
- ④小野奈生子、教室における社会化場面の分析—「1 年生らしさ」の形成過程に着目して、日本教育社会学会第 62 回大会、2010 年 9 月 19 日、関西大学
- ⑤越川葉子、授業場面における児童「集団」の形成—教師・児童による逸脱児童の協働的産出過程に着目して、日本教育社会学会第 62 回大会、2010 年 9 月 19 日、関西大学
- ⑥有本真紀、明治期における小学校卒業式の変容—「感情の共同体」の創出、日本教育社会学会第 62 回大会、2010 年 9 月 18 日、関西大学

[図書] (計 14 件)

- ①有本真紀、講談社、卒業式の歴史学、2013、261
- ②北澤毅、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会的探究、第 1 章 感情はどこにあるのか—社会化・制度化への着目、2012、3-21
- ③小野奈生子、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会的探究、第 2 章 感情社会学の変遷と課題—社会・文化性の問い方をめぐって、2012、22-40
- ④清矢良崇、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会的探究、第 3 章 日常生活における感情経験の構造、2012、41-52
- ⑤間山広朗、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会的探究、第 4 章 微笑みあう涙—「発達」の原初形態としての泣きの記述、2012、55-72
- ⑥小野奈生子、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会的探究、第 5 章 ことばの前の〈泣き〉—「泣き声」の意味づけをめぐる相互行為の分析、2012、73-88
- ⑦鶴田真紀、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会的探究、第 6 章 しょうが

い児が泣く一泣きとその記述をめぐる相互行為分析、2012、89-107

- ⑧越川葉子、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会学的探究、第7章 「家族」になった「父」と「娘」—成員性の喪失と回復手続きとしての〈泣き〉、2012、111-133
- ⑨稲葉浩一、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会学的探究、第8章 「涙の共同体」としての『3年B組金八先生』—卒業式における「集合的な泣き」の分析、2012、134-157
- ⑩有本真紀、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会学的探究、第9章 「感情の共同体」の創出—明治期における小学校卒業式の変容、2012、158-188
- ⑪北澤毅、勁草書房、文化としての涙—感情経験の社会学的探究、終章 社会の中の涙・涙の中の社会、2012、189-206
- ⑫北澤毅、ミネルヴァ書房、新しい時代の教育社会学、第11章 厳罰化は何をもたらすか—デュルケム犯罪論を読む、2012、146-158
- ⑬北澤毅、学文社、〈教育〉を社会学する、第8章 学校的社会化の問題構成—「児童になる」とはどういうことか、2011、212-237
- ⑭間山広朗、学文社、〈教育〉を社会学する、第4章 いじめの定義問題再考—「被害者の立場に立つ」とは、2011、98-126

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

北澤 毅 (KITAZAWA TAKESHI)  
立教大学・文学部・教授  
研究者番号：10224958

### (2) 研究分担者

有本 真紀 (ARIMOTO MAKI)  
立教大学・文学部・教授  
研究者番号：10251597

### (3) 連携研究者

間山 広朗 (MAYAMA HIROO)  
神奈川大学・人間科学部・准教授  
研究者番号：50386489